

認知症を知ることから始めませんか

9月は認知症月間です。皆さんに認知症のことを少しでも知ってもらえるよう、今月は実際に家族を介護している方、していた方のお話しを紹介します。

介護者の声

最初に紹介するのは、町内在住のご夫婦です。介護保険サービスを利用しながら、認知症のある妻を夫が介護しています。

1年ほど前から初期症状

夫は家事全般をこなしていますが、大変だと思ったことはないという夫に話します。



妻も「優しくいろいろなしてくる、素敵な夫」と話しています。仲睦まじいご夫婦ですが、1年ほど前から妻に認知症状が始めていた様子。初期症状としては物忘れが主で、その他にごみの分別や片づけができなくなる、茶碗をガスコンロにかけてしまう、お金をどこかにしまい込んでしまい、必要な支払いができないなどがあったようです。今年1月に地域包括支援センター（以下・包括）に相談があり、2月に専門医にて認知症との診断を受けました。

妻と接するうえでの工夫

妻がたまに怒ることがあると、夫は話します。たとえば、カレールーを出してきて「食べさせてもらってない」と言うことがあり、その時はこのままでは食べられないということを説明したそうです。他にも、自分の洋服を自分ののではないと言ったので、実際に着て見せて「俺には小さいから違うでしょ」と説明したこともあったと、夫なりに穏やかに接する工夫を重ねてきたことを教えてくださいました。



手作りの木彫り工芸

夫は「薬のおかげでそんなに症状が進んでいない。喧嘩もするけど、穏やかに、最後まで今の家で一緒に過ごしていきたい。それから、自分の趣味（木彫り工芸）もまた再開したい」と話してくれました。



次に紹介するのは、町内在住の萩原みち子さんです。萩原さんは、認知症と診断された両親を約5年間介護しています。

母親に認知症の診断

母親は転んで頭を打ち、脳血管性の認知症と診断され、寝たきりになりました。「最初は何かわからない状態だったけど、少しずつ家族のこともわかるようになった」と萩原さんは振り返ります。幻覚なども見られ、アルツハイマー型とは異なる症状もありました。萩原さんはデイサービスやショートステイを活用しながら介護を続け、最終的には施設にお願いすることに。



父親の様子にも異変

その後、一人で暮らすようになった父親の様子に異変が見られるようになりました。

「母親を看ているときはまだ父親は元気で、施設にも毎日会いに行っていた。たまに『ん？』と思うことはあったけど、認知症とは思っていなかった」

別世帯に住んでいた萩原さんは、一人になった父親の様子を朝晩見に行っていました。「毎日繰り返し見に行っていると、鍋焦がしがあるのがわかり、それが1番心配だった。数年前から、たった今話していたことをまた話したり、カラオケで同じ曲を「久しぶりに歌う」と言っ

て歌ったり……。今思えばそれが認知症の症状だったのかと思う」

そんな時、町が主催した認知症に関する講演会で認知症の専門医の話を聞く機会があり、近くに良い先生がいることに安心したそうです。

その専門医の話をきっかけに、萩原さんは父親に受診をすすめました。その際、「勉強のため」と説明し、「認知症」という言葉は使わなかったそうです。診断後、父親は1日1回の薬を処方されたため、萩原さんは毎日父親のもとへ通いました。萩原さんは両親の介護について、「地元に戻るまでの40年自由



生前のご両親の様子

からは親を看るのが仕事と思っていた」と話します。父親を認知症の人として見ることはなく、父親本人も自覚はなかったこと、先生からも『認知症は症状であって病気ではない。その症状もずっと出ているわけではない』と聞き、本当にその通りだと感じたそうです。

父親が見せた涙

父親が認知症と診断されたあと、母親の死に立ち会ったときに、父親が一人でポロッと涙を流していたことで「母親のことが好きだった」という父親の感情が垣間見られ、忘れられないと話してくれました。

それから父親のプライドを傷つけるようなことも絶対にだめで、こちらが大きな声を出すと相手も声を荒げてしまうので、穏やかに接するように心がけていたそうです。